

歴史・人類学系

教員数	教員等数 (人)	教授 19 (18)	助教授 13 (13)	講師 4 (5)	助手 3 (4)	技官〔準研〕 3 (3)	
	異動状況 (人)	退職・転出 3 (4)	昇任 2 (3)	採用 2 (3)	学内 － (－)		
研究活動	研究発表 (件)	論文・著書発表数		学会発表数			
		国内	国外	国内	国外		
		128 (161)	9 (15)	10 (25)	4 (10)		
	受賞数(件)	－ (－)					
	研究費等		採択件数	採択率(%)	金額(千円)		
		科学研究費	11 (12)	50 (30)	27,350(31,800)		
		学内プロ	12 (13)	55 (52)	5,450 (5,320)		
奨学寄附金件数・金額		2件	1,100千円	(2件	1,200千円)		
受託研究件数・金額		件	千円	(1件	600千円)		
受託研究員	人 (人)						
施設・設備							

・ () は前年度の数値を示す。

1 歴史・人類学系の活動

当学系構成員の研究は、国内外の地域でのさまざまな現象を研究対象として、堅実な実証的方法で研究を進めているのが特色である。学系全体の研究発表件数は減少しているとはいえ、個々人の研究活動は例年通りおむね順調に進行してきた。ここ数年来、大学院重点特別経費の配分などを契機に総合的・学際的研究の推進に努めてきたが、将来大きく展開する可能性に富む、いくつかの共同研究の芽ができつつある。

科学研究費などに基づく海外での調査研究や、講義を通して、海外との交流も進んだ。日本史分野では「ヨーロッパとの文化交流」、東洋史分野ではトルコ、中国各地での現地研究員との共同調査、西洋史分野ではトロント大学との「メソポタミア王室碑文」に関する共同研究などが行われた。また、文化人類学分野ではケニアやフィジー、あるいは台湾での海外調査が行われ、考古学分野ではタンザニア、エジプト、シリアの各地での発掘調査が行われた。国際化の時代を反映して、海外での調査や各地の研究者との交流が着実に進展しつつある。

学系紀要の『歴史人類』、各分野の研究・調査報告書『日本史叢』、『歴史学・考古学研究』、『歴史地理学調査報告』なども予定通り出版された。

2 自己評価と課題

当学系には、各専門分野で国内の学会をリードする研究者が少なくないが、競争原理が強まりつつある現状のなかで、なお一層学系の活動を国内外にアピールしていく必要がある。そのためにも、分野を超えた相互交流の活発化による新研究領域の開拓に努力する必要がある。また、当学系の構成員は、市長村史の作成や講演など、社会貢献も少なくはないが、専門の学会だけでなく、啓蒙活動も従来以上に積極的に行う必要があろう。

平成15年度にも、残念ながら競争的資金の獲得に伸び悩んだ。そのため、それらへのより積極的な応募に学系として取り組みつつある。史・資料の整理などを行って研究空間の確保に努めているが、史・資料の保存や作業のための部屋が不足していることが恒常的な悩みである。